

ヤンデレユニットカーニバル

ヒエロニムス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

小鳥遊千尋は幼馴染である高海千歌が始めたスクールアイドルAoursのマネージャーとして、千歌の恋人として支えていた。

しかし、そんな日常はある日を境に脆く崩れ落ちた……

目次

1話	Guilty Kiss	1
2話	Guiltyな日々	5
3話	救い	9

1話 Guilty Kiss

「今日はどこに行こっか？千歌」

「うーん、千ちゃんと一緒ならどこでもいいや！」

ここは僕と僕の彼女である高海千歌の通う浦の星女学院。

そこの二年生の教室に僕、小鳥遊 千尋はいた。

僕と千歌、あとここには居ないが曜は幼馴染で、千歌のひよんな一言からスクールアイドルAqoursとして、共学化、廃校を救うためこれまで頑張ってきた。

もちろん、僕はマネージャーという立場からだが。

そして僕は、浦の星女学院にテスト生として通っている。

それ以外はなんの変哲もない普通の日常で、青春を謳歌している。今は昼休み。

いつもは僕と千歌、曜、梨子と一緒に昼食を取っているのだが今は二人とも用事があるといつてどこかに行ってしまった。

「梨子ちゃんと曜ちゃんどこにいったんだろうね」

「曜だって梨子だって暇じゃないんですよ。」

曜は水泳部と掛け持ちだし、梨子は作曲してくれてるんだ。」

「そう……だよね。」

「どうかしたの？千歌」

「いや、きつと気のせいなんだけどね、何か嫌な予感がするんだ。大切な物が失われる予感」

「そっか……気を付けないと」

こんな話をしていると校内放送のチャイムが鳴り、友達と談笑をしていた教室は一気に静まる。

『え〜千尋は今すぐ理事長室のマリーの元までcome on!』
静かになった教室内に独特のイントネーションのある声が響く。

鞠莉さん公私混同してませんか？

学校の時くらいしつかりしましょうよ……

「千くん、なんか悪いことしちゃった？」

「それで呼ばれるのは多分千歌だけだよ」

「あゝ千くんひどい〜！」

「じゃあ行ってくる。」

そう千歌に言っつて、僕は理事長室へと向かった。

∞∞∞

きちんとノックをして、理事長室へと入ると、理事長室の高級そうな椅子に座って、ニコニコとしている鞠莉さんがいた。

しかし、いつもの太陽のように明るいつまみではなく恐怖が煽られるような気色の悪い笑み。

「どうしたんですか？鞠莉さん」

「んもお、マリーって呼んでっつていつも言っつてるのに〜」

「一応ここ学校ですし、ここは敬うべきかと」

「まあいいわ。本題に入りましょ」

「なんか問題でもあるんですか？学校での問題なら僕はなんも出来ませんよ」

「そういうのじゃないわ。あのね……」

一呼吸置き鞠莉さんはこう言っつた。

「あなた、マリーのものになりなさい？」

……………え？

「それはどういう……」

僕の持っつている何かを寄越せ。という事だろうか。

それとも別の何かか

「どういうも何も私はあなたが欲しいの。要するにマリーの婚約者になっつてという事ね」

最後に可愛らしくウインクをした鞠莉さん

僕が欲しい？婚約者になれ？意味が分からない

「知っつてると思っつうんですが僕には千歌っつていう彼女がいるので」

僕には千歌がいるのだ。

ずっつとこれから人生を一緒に歩んでいききたいと思っつている彼女が「そんな事簡単よ。別れてしまえばいいわ」

いつもの鞠莉さんらしからぬ言葉をとても冷たく言い放った。

「そんな事出来るわけ……」

「なんで？ マリーと結婚すればいっぱい贅沢できるわよ？」

働く必要なんてないし、貴方は毎日マリーの帰りを待つてマリーを癒してマリーとイチャイチャしてればいいだけよ？ 勿論マリーも精いっぱい貴方にご奉仕するわ。」

それが当たり前かというように言い放つ鞠莉さん。

でも、それは確かに魅力的な提案だ。

それでも千歌を裏切る訳には行かない。

「千歌っちより貴方をより深く愛してるのは私よ？」

椅子から立ち上がり、ジリジリとこちらによつてくる鞠莉さん。

逃げなければ……！

急いで扉まで駆け、開けようとしたが、扉のドアノブは回らなかつた。

「ふっふっふ……この扉は闇の魔術によつて閉ざされたわ！」

「ロック掛かるように細工したただけなんだけどね……」

すると後ろから聞きなれた声が二つ聞こえた。

急いで後ろを振り向くとそこには、善子と梨子がいた。

「善子と梨子!? なんで……つていうか早く開けてくれ！」

「だくくめっ」

「断るに決まってるじゃない」

「なんでっ……!」

「私もリトルデーモンの貴方が欲しいからよ。そして、貴方を誰よりも深く愛してるからよ」

「私も善子ちゃんと一緒かな。」

「ヨハネ！ つてか鞠莉！ 何勝手に独り占めしようとしてるのよ！ 三人でつていう話でしょ！」

「そうよ！ ずるいわ！」

鞠莉さんは二人の元に行き、言い合いを始めた三人をよそ目にただ目の前で起こった事が理解出来ずに呆然とした。

今まで何となくおかしいと思った出来事はあった。

皆と一緒にランニングで汗を流し、その汗を拭いたタオルが無くなっていたり、クラスの女子と話していると何処からか強い視線を感じたり。

そんな風に必死に考えていると目の前に鞠莉さんがいた。

考えている間にいつの間にも接近されていたみたいだ。

僕の元にジリジリと近づきそして……

僕の唇に鞠莉さんの唇を重ねた。

呆気にとられてるのをいい事に舌を入れ、口腔内を蹂躪する。

口腔内を余さず舐め、堪能した鞠莉さんと僕の口は唾液でべとべとになった。

そして、口の周りをひと舐めした鞠莉さん。

「何でこんな事……」

「私、欲しいものは奪いたいタイプなの

これが本当の Guilty Kiss ね……♡」

その言葉と共に自分の中の日常が音を立てて崩れた音がした。

2話 Guiltyな日々

「ん〜貴方を独占出来るなんて very very ナイスね!」

「ふっふっふ。堕天使ヨハネに掛ければ造作も無いことよ!」

「結構鞠莉ちゃんの力も借りてたような……」

あの後僕は、鞠莉さん家ホテルニュー小原の地下らしき場所に連れていかれた。

せめて、彼女である千歌に連絡くらいはさせてくれと言っても、

「え? 貴方の彼女は私たちでしょ? 連絡する必要ないわ」

と言われてしまった。

着替えを取りに行つて、その時に逃げようと思つたが、ホテルの中に既に運び込まれていた。

きつとこれは用意周到に練られた計画なのだろう。

外部とも連絡は取れないようになっていた。

「なんでこんな事を?」

「さつきもマリーも言つたと思うけど、貴方の事が大好きだからよ。

そして、千尋の彼女とかほざいてる千歌は抜け駆けしたんだし。そして私たちはそんな穢れた貴方を救うためなのよ?」

「抜け駆け……?」

千歌が何かしたのだろうか。

聞いてもそれ以上は教えてくれなかった。

それから、僕は三人に抱き着かれたり、キスされたり、ご飯を食べさせられたりと自由にさせてくれなかった。

勿論三人ともとても可愛いし、魅力的な女の子たちだ。

それでも彼女がいる以上裏切ることとは出来ないしそういった行動を取ることは避けたい

「ねえ、鞠莉さん。学校はどうするの?」

せめて学校くらいは行きたい。

そしたら助けを呼ぶことも可能かもしれない。

「Oh・schoo! 本当は行かせないで、ここの部屋にずっと居てマリー達を待つてほしいんだけど……」

「いくら鞠莉ちゃんと言えど、テスト生をずっと欠席に出来ないって事ね」

「これほどテスト生という物を恨んだことはないわ。」

流石にテスト生が欠席になるのは、理事長として親に任させている以上ダメだという事で学校くらいは通わせてもらえらるみたいだ。

ここにずっといたら頭がおかしくなってしまうそうだ。

「勿論、我がリトルデーモンの傍にこの墮天使ヨハネがついてあげるわ！」

「善子ちゃんと学年違うでしょ……ここは同じ学年で同じクラスの私がついてあげるわ」

「マリーもちゃんとしてあげてあげるわ！」

「鞠莉さんがサボるとダイヤさんが黙ってないと思うけど？」

すると、頬に痛みを感じた。

少し経って僕は、梨子に叩かれたのだと気づいた。

「なんでダイヤさんの話するの？」

目を鋭く細めて、こちらを睨む三人。

その視線は人を殺せるくらい強く、恐怖を感じた。

「この墮天使ヨハネの前で他の女の名前を呼ぶのはやめなさい。我がリトルデーモン」

「そうそう、良くないデース！」

彼女達の前で他の人の事を話すのは地雷のようだ。

気を付けよう。

∞∞

それからという物本当に彼女達は僕についてきていた。

教室で曜や千歌と話すことも出来ず、図書室に逃げようとしても善子が居て、トイレにもついて来ようとしていたくらいだ。

特にひどいのは、A q o u r s の練習のときだ。

アドバイスは、三人を通して伝えられ、三人以外と喋ってしまった場合はキスや愛の言葉をせがまれ犯される。

こんな生活を続けていて碌に眠ることも出来ず、安心も出来ないため疲れ果ててしまっていた。

そんなある日、廊下で善子が前を歩き僕はその後ろを歩いていると、急に誰かに引つ張られ部屋に引きずり込まれた。

「おわっ！」

勢い余って転んでしまい、犯人の顔を見るべく顔を上げると……

「お怪我はありませんか？急にこんな事をしてしまって申し訳ありません。ただ見ていられなくて……」

この育ちの良さが表れているこの声は……

「ダイヤ……さん？」

「ええ、そうですね。お話をいたしましょう。どうぞお座りください。」

周りを確認するところには生徒会室のようだった。

取り敢えず促されるままに座る。

「最近、元気がないようですが何かありましたか？」

ダイヤさんには見抜かれていたか……

でも、迷惑はかけられない

「別になんもないですよ」

「目の下のクマが酷いのはなんですか？」

「最近、ハマっているゲームがあつて……」

「ため息が多いのは？」

「そのゲームのやりすぎで疲れちゃつて」

「最近、鞠莉さん梨子さん、善子さんに対する態度が怯えているように見えるのは？」

僕は言葉に詰まった。

本当の事を言つてしまいたい。誰かに助けてもらいたい。

「気のせいですよ」

そう答えた直後に僕はダイヤさんに抱き着かれた。

ダイヤさんの温かさに包まれて、なんだかとおつても安心した。

「隠さなくてもいいんですのよ？何かあの三人に何かされているのではないですか？梨子さんも善子さんも家にあまり帰らず鞠莉さんの家に多く出入りしているのは知っています。そんな無理なされずとも安心してください。それとも私ではダメでしょうか」

こんなに心配してくれていたんだ。

それから僕はすべてをダイヤさんに話した。

それを適度に相槌を打ちながら聞いてくれていた。

「なるほど……あの三人がそんなことを……」

「どうすればいいですか？」

「とりあえず私の家に来ませんか？あの小原家でもある程度黒澤家なら融通が利きますわ」

そのまま押し切られるように僕は黒澤家に逃げた。

その黒澤家に向かう途中にこんな事を教えてくれた。

「実は私だけではなく果南さんや花丸さんも心配していましたよ」と

3話 救い

あの後、ひたすらダイヤさんは僕の黒澤家に向かつてる途中ずつと、ひたすらダイヤさんは僕の背中をさすって優しく包み込んでくれた。

その優しさがとてもありがたかった。

木造の趣のある門をくぐり、立派な武家屋敷へと近づいていく。

自分がなんともこの場に似合わない様で気後れしてしまう。

「どうしたんですか？早く入りましょう？中で果南さんも花丸さんも待ってますよ。」

とダイヤさんに促される。

そっか……あの2人にも心配掛けてたんだ……悪い事しちゃったな。と足早に黒澤家に入る。

家の木の香りが何とも心を落ち着けてくれる。

そのまま茶の間へと通される。

そして襖を開けた途端に何か温かいものに包まれた。心から安心するようなそんな温かさ

「大丈夫!？」

その主は果南さんだった。

「ごめん……鞠莉達があんなことしてるなんてもっと早く気付ければよかったのに……そしたら」

「いえ、気づいてくれただけでも助かりました。助けてくれてありがとうございます。」

「そんなの当たり前すら。丸達はいつも千尋君に助けても貰ってるから」

「花丸さんの言う通りですわ。千尋さんにはいつも支えられてもらっていますから。」

この鞠莉さんや梨子、善子がおかしくなってしまうてから千歌と連絡を取れてなく、あの3人に何かされてないか心配だが今はダイヤさんや果南さん、そして花丸ちゃんという心強い味方を得れたのは良い。

「今なら、千歌と連絡がとれるだろう。心配してるだろうし。」

「連絡先はあの三人に消されてしまったが、十千万の連絡先からいけば大丈夫だろう。」

「携帯をポケットから取り出そうとした時に気づいた。」

「携帯が無いのだ。梨子たちは携帯は一応持たせてくれていた。まあ、連絡先を消されたり僕への愛の言葉をブツブツとマントラの様に言っていた音声データだったりやりたい放題されているのだが。その携帯がないのだ。」

「何かお探ですか?」

「えっと、携帯知りませんか?」

「存じませんね……どっかに落としたのではないですか?」

「そうですね。」

「宜しければ黒澤家で新しくご用意しますか?」

「いえ、これ以上迷惑掛けるわけには」

「その内探してみるか……」

「そういえばルビイちゃんってどこにいるんです?」

「ルビイちゃんが見当たらなかった為何となく聞いてみる。」

すると、この場の温度が下がった気がした。

そして三人の目は鋭く吊り上がった。

「なんでルビイちゃん?」

「えっと、ルビイちゃんがないようなので何となく気になって」

「今はルビイちゃん関係あるずら?」

「ルビイは今千歌さんの所に泊まっているらしいですわ」

「そうなんです。千歌のところ……連絡しないと」

「待って!もしかして鞠莉とかにバレるかもしれないし控えたほうがいい」

「果南さんの言う通りか……」

そしてその後は帰ろうともしたが、三人に押し切られる形で泊まる事となった。

「彼が居なくなりましたですって!?!」

「ええ、してやられたわ……」

「ただの不注意じゃ……」

豪華なシャンデリアの光が怪しく照らす部屋で三人は話し合っていた

「何処に行ったのか分かる？」

「うくん、GPS見てるけど学校から動いてないの。」

「誰かに誘拐されちゃったの!? 大変! 早く助けに行こうよ! 彼が穢されちゃう」

「落ち着きなさい。一応彼を連れ去った人物に心あたりはあるわ。」

「良かった……早く助けに!」

「彼を奪った事を後悔させてあげるわ……」

「彼にも私たちの魅力を教えてあげてないとね……♡」

「私達から逃げようなんてGuiltyね。」

そして、口を歪に曲げながら三人は笑った。